



生島遼一

日本の小説



白日書院

生島遼一

日本の小説

白
日
書
院

1947

— 日本の小説 —

昭和二十二年七月五日印刷
昭和二十二年七月十日發行

定價 六十五圓

著者 生田 永吉
鳥 遼 一

發行者 增 永 要 吉
東京都世田谷區北澤二丁目百番地

印刷者 橫 尾 弘 明
東京都千代田區九段二丁目一番地

發行所

東京都世田谷區
北澤二丁目〇〇

株式會社 白 日 書 院

電話世田谷二七四七番

目次

竹取物語の美しさ……………三

宇治十帖……………一九

——私の讀んだ『源氏』——

今昔物語と堤中納言物語……………二六

——短篇小説の傳統——

近世小説……………三六

——西鶴——

雨月と八犬傳……………二八

鷗外・漱石・獨歩……………一三四

『家』と『つゆのあとさき』……………一五三

谷崎潤一郎論……………二二六

秋聲小論……………二四三

日本の小説と西洋の小説……………二五九

あとがき……………二八九

日本の小説

竹取物語の美しさ

今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて、竹を取りつゝ、萬の事につかひけり。名をば讃岐造麿となむいひける。その竹の中に、本光る竹ひとすぢありけり。怪しがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人いと美しうて居たり。

この中の「本光る竹ひとすぢありけり」といふのと、「三寸ばかりなる人いと美しうて居たり」といふところが大變美しい。私が初めて、まだ高等學校の學生の頃この物語を讀んだ時に、かういふ文章からまことに鮮かな印象をうけたのを覚えてゐる。美しい竹の青さと、小柄な白く光るかぐや姫の色彩から來る感じがくつきり残つてゐる。末段のかぐや姫昇天のところ

の眩ゆく照らされた光りの印象もつよいものだ。かういふことは主観的な印象だが、これを言はないと、私のこの物語に感じてゐる美しさを語れないやうな気がする。

話の筋だけとつて考へると、まことに童話のやうなもの、お伽噺のやうなものだが、實際に読んでみると、この物語は決してたわいない、幼ない文學ではない。お伽噺といへば、後世にあらはれた文正草子とか鉢かつきといつたやうなもの、いはゆるお伽草子があるが、あの種のものとは全く性質のちがつたものだ。文章から來る鮮明さが、ちがふ。また、お伽草子といへば稚拙な繪で描かれた奈良繪本が聯想される。竹取物語も奈良繪本や江戸期の刊本で挿繪の人つたものが出てゐるけれども、ああいふ繪は、竹取にはまるでふさはしくない。

これが支那の神仙譚の翻案だといふ説がある。かぐや姫は印度の經典にある月上女に似てゐるさうである。古い日本民間傳説ばかりでなく、支那、印度あたり大陸系の説話材料が多く採りこまれてゐる。もつと近代的な見方をすると、人界を脱して清淨な理想世界への憧憬、宗教的理想をあらはしたものだ、さういふ考へもある。どうだらうか。私はもつと素直な、小説讀者の讀み方をしたいと思ふ。

小説技法から見て、まことに手際のいい手腕が示されてゐるのに驚く。これだけの雑多な説話の材料を、うまく、混乱させずに用ひてゐる。構想もいいし、話法の進み方も、漸層法的に落ちついて効果を上げてゐる。人物も一人一人、個性的に書き、確かな強い描線である。所々、あざやかな感覺表現が目につく。絶望した人の顔が「草の葉の色」だつたり、月光に照らし出されて「毛の孔」まで見えると云つた表示法は、生きてゐる。五人の貴公子の求婚挿話は、ああいふ求婚談は古い説話の一つの類型であるらしいが、ここでは最も巧みに書けてゐる。最後の昇天が近づき、月世界から迎への來るところに至るまでは、文章の簡潔と表現の確かさで、讀んでゐる者の眞正面から白光で射られるやうな感じだ。

古美術を見ても、よく古拙だといふやうな評をする。古人の創つた藝術を見て、我々は本當に何か足りないもの、稚ないものを感じてそこに心を惹かれるのだらうか。それはそれで充ち足りてゐる美ではないのか。その證據に、我々の整つたと考へる表現でそれを補つてみても、美しくはならない。美しくもならないし分りやすくもならない。この物語の初めの方を現代文に譯してあるのを一つ掲げてみる。

「もうすうつと昔のことだが、竹取の翁と呼ばれる人があつた。

この翁は、毎日毎日、野原や山に出かけて、竹を切り出しに行くと、竹藪の中に、根元の光る竹が一本あるのを、ふと見つけた。

「おや、可笑しいことぢやぞ。」

翁は不思議さうにその竹の側へ寄つて行つて、よくよく見ると、どうも竹の筒の中から光が漏れて出るやうである。

「何だらう。不思議なことぢや。」

翁は非常に注意しながら、光る處を切り開いて見た。すると、その筒の中に、可愛らしい姿をした、三寸ばかりの人が、這入つてゐるではないか。」

この現代語譯を悪いとは云はない。ただ、かうやつて譯して、それで、一層分りよく平明になつてゐるのだらうか。原文から來る直接のものの方が、はるかに鮮明で、事足りてはゐないか。原文の簡潔を、多くの言葉で補つてみることは、どういふ意味なのだらうか。特にこの譯文を責める氣は少しもないのだが、多くの場合、古い藝術を見てそれのもつてゐる表現に何か

足りないものを感じ、これを我々の表現で補ふのは、かういふ結果になるものではないかと思ふ。この譯文をもつと洗煉させてみても結果は同じである。

物語の祖おやといふ有名な呼び方は、「源氏」の繪合の卷に「物語の出で來初めの祖なる竹取の翁」と出てゐることによる。これは周知である。もとより我國小説文學の萌芽のやうなものを古くたづねるなら、竹取以前にさかのぼらねばなるまい。西洋小説の起源を普通は中世紀の騎士物語に求めてゐるのも、もつと溯ることはいくらも出来るのと同じである。記紀の神話や民間の傳説中にも、さういふものを見ていい。既に、口碑を漢文體で物語化した浦島子の話などの存在も考へられてゐる。竹取にも、漢文體でつづられたものがあつただらうと推測されてゐる。しかし、我國で「物語」と呼ばれる文學は、假名の使用が自由になり、作者も漢語臭や異國趣味から脱して、日本人らしい情操を盛りうるやうになつてから始まつたと見ていい。それはやはり平安朝初期、そしてその頃の文學性格を代表するものとして、物語の祖なのである。同じ平安朝期の作品でも、中期の源氏以後のものでは、判然とした差異を見せてゐる。女流物語の優雅調の抒情的文章とちがつて、「竹取」「宇津保」「落窪」などは、文章が簡勁で、句切も明白

でさつぱりしてゐる。内容からいつても明るい滑稽や洒脱味を豊かにもつてゐた。

さういふ特色を見るために、そして作者が最も小説家としての技量をふるつてゐる所をうかがふのに、例の五つの求婚談を少し解剖してみよう。

五つの小話を並列して、ならべてあるのはたしかに古拙の感じがする。互ひの話が少しも聯絡してゐない。この物語が繪卷の詞書だつたといふ説が眞説ならば、さう思はれる所である。

かくや姫が天竺の石鉢以下五つの難題を出す。このやうに求婚する男に難題を出す形式は、昔の傳承説話によくある形式だとされてゐる。面白いのは、この物語の作者の扱ひ方だ。「今昔物語」に、これと同じ話が「竹取翁譚」として記載されてゐるが、この「今昔」の中に用ひられてゐる難題の型が、日本の民間説話に基いてゐていはば古型ださうだ。先きに出た「竹取」に書かれてゐるものは、却つて新型で、大陸系の材料を採つてゐる。これなどはこの物語作者の創意であらう。さういふ新奇な材料を用ひて、變化をはかつたのである。

第一話は石作皇子である。佛の御石の鉢といふものをとつて來ることを求められた。この皇子は「心のしたくある人」とあるが、あまり計を用ひる様子がない。天竺へ求めに行つたといふていにして、隠れ、三年経つてから大和國十一郡の山寺から古びた鉢を探し出し、これを鉢

の袋に入れて持つて行く。これが偽物であることと何の苦もなく見あらはされる。第一話はず無造作に、淡白に運ぶ。次ぎからだんだん複雑にする。これは作者の豫定であらう。

第二話は蓬萊の玉の枝を求められた車持皇子が出る。「心たばかりある人」とあるだけに、さすがに前者よりは念を入れた策を用ひてゐる。玉の枝を採りに出かけた、さう云つて隠れるところは第一話の主と同手法だが、いよいよ註文の品がとのひ、それを姫の前へ運んで来た時には、「この皇子には負けぬべし」と、當のかぐや姫を驚かせたほど、成功に近かつた。前の石作皇子ほど軽く一蹴するわけに行かないところ、話として複雑化してゐるわけだ。しかも、今度の皇子は品物を持参したのみならず、天竺における冒険談まで語つてさらに迫眞を添へる。昨日やうやく難波から歸りついたところだと言ふ。

「さらに潮に濡れたる衣をだに脱ぎかへでなむこちもうで来る」

小説家の常套たる描寫手法まで用ひて、現實感を加へようとした。丁度そこへ、偽物の玉の枝の製作に雇はれてゐる工匠たちが賃銀を請求しにあらはれて、策は外からやぶれる。成功の一步手前まで保たせ、緊張させるのが技巧。

第三話は右大臣阿倍の御主人の順番である。難題は火鼠の裘だ。「財豊かに家廣き人」とこと

あつてあつて、よほど富裕の公卿らしい。そこで財力によつて解決しようとするのも *logique* である。その年來朝した唐人王^{わんけい}兮といふ者に文を送つて、火鼠の裘を註文した。竹取物語の書かれた頃、さういふ唐人商人がよく來朝し、これらの商人を通じて、富裕な公卿などが舶載の珍品を買つた事實があるといふ。この話に出る王^{わんけい}兮のやうな辣腕の唐商人もゐたことと想像される。阿倍御主人に「今五十兩たまはるべし」などと駆引の手紙をよこすあたり、商人氣質を描いてゐる。この物語の世態描寫小説としての一面を言はれる所である。

前二話がいづれも初手からたぶらかさうといふ術策に出たのに變つて、この阿倍右大臣はそ
のやうな成心をもたず、人柄良く品物を買はうとする。至極善人らしく描かれてゐる。騙され
る人物は御當人である。唐人が送つて來た裘を「あなかしこ」と箱にをさめ、身づくろひして、
その上に妻問ひの歌まで用意して、鷹揚に出かけて行く。かういふ好人物らしい鷹揚なこの人
の風貌、ゆつくり落ちついた態度と面白く對應してゐるのが、速度的な結末のはこびである。
かくや姫は品を見て、外觀の美をよく認めながら、火に入れて眞疑を試したいと云ふ。大臣も
あくまで鷹揚に「はや焼きたまへ」と自信たつぶりである。

「火の中にうちくべて焼かせ給ふに、めらめらと焼けぬ」

この段のここを讀みたまへ、めらめらと無造作に焼ける様が見えるから不思議である。(ことも前に引いた現代語譯では六七倍の長さのびてゐて、原文の迫眞は見出だされない。)右大臣は顔色を變へた。その形容に「顔は草の葉の色にてゐたまへり」とあるのが清新な感覺表現であることは、前に言つた。

第四話、龍の首の玉——五個の聯話中、もつとも雄壯で、描線太く語られ、もつとも明快な失敗である。この求婚談にあらはれる人物については、實在人物の推定について、色々な考證が行はれてゐる。研究家は註解書について見られるといい。ついでながら、この物語の最も有名な註解は宣長門下の田中大秀が著はしてゐる。この第四話の主人公は大伴氏になつてゐるので、これは作者のつもりでは、武人の名門大伴氏を想起して、求婚者の中に武人型の剛直單純な人物を加へたのであらう。そこで、大納言大伴御行は、難題中でも最も豪快な趣のある龍の珠といふものを引き當ててゐる。果斷な武士性格を示して萬事手取り疾い。まづ家來に探索を命じて旅立たせ、珠もかぐや姫も己の手に歸することを確信して、疑はない。夫人を離別し、邸内は新妻を迎へるために新裝される。

やがて家來共の探索がいつまでも成功しないことに業をにやして、自ら船出することにし

た。「我が弓の力は、龍あらばふと射殺して、首の玉をば取りてむ」と勇武を自信するあたり頼もしき限りだ。しかるにその船中に、未曾有の大暴風雨に會ふ。龍神の怒りである。さすがの大伴氏も「まだかかるわびしき目は見ず。如何ならむとするぞ」と悲しみ嘆く始末で、ふと射殺さん勢ひだつた龍神に「今より後は毛の末一筋だに動かし奉らじ」と誓詞を申し入れて、やうやく雷鳴をさまる。三四日後に明石の濱に打上られ、家にかつぎこまれる。よほど懲りたと見え、

「かくや姫てふ大ぬす人のやつが、人を殺さんとするなりけり。家のあたりだに今は通らじ。男どももなありきそ」

と、家臣まで戒めるところ、明朗な諧謔を放つ。文章が内容に應じて、うまく書けてゐる。船中暴風雨の箇所は、力強く書かれた描寫の逸品と從來評されてゐるものだ。

第五話、中納言石上麻呂の場合は、滑稽といへば最も滑稽をきはめてゐるが、一抹あはれを漂はしてある。燕の子安貝をとらうとして高い軒に引き上げられるこの中納言も、人のよい、無策で濃厚な人間らしく書かれてゐる。手に觸れたものを握つて下ろさせる途中、繩が切れて落ち、氣絶しながらも、正氣づく、「とにかく子安貝を握つたのはうれしい。早くその『顔』